

気仙沼市における過去の震災伝承の実態把握 ―津波による人的被害軽減に向けて―

東北大学 工学部 学生員 ○新家 杏奈
 東北大学 災害科学国際研究所 正会員 佐藤 翔輔
 東北大学 災害科学国際研究所 非会員 川島 秀一
 東北大学 災害科学国際研究所 正会員 今村 文彦

1. はじめに

東日本大震災発生以降、東日本大震災による地震・津波の被害や、防災・減災の訓練・知識、復興の歩みを後世に伝承する活動が行われている¹⁾。災害に関する伝承活動は、繰り返し発生する大規模な災害による教訓を後世に伝え、その災害が再び発生したときの被害を減少させる目的で行われている²⁾。これまで、災害伝承の実態把握や有用性に関する研究が行われてきた。東日本大震災発生以前に行われた東北地方の津波伝承の実態に関する調査・研究として、津波常襲地域である岩手県釜石市での親子間の津波伝承の実態把握と伝承状況と子の持つ防災意識との関係に関する研究や³⁾、岩手県陸前高田市で行われた津波をはじめとする災害のリスク認知や知識、過去に発生した津波の認知や伝承手段に関する調査⁴⁾が見られる。

本稿では、今まで津波の伝承状況について詳細な調査が行われていなかった宮城県気仙沼市で調査を行い、東日本大震災発生以前の津波伝承の実態を明らかにすることを目的とする。宮城県気仙沼市は県の北部に位置し、市の北側を岩手県陸前高田市と接している。リアス式の海岸地形をもつため、これまで多くの津波災害が発生してきた地域であり、また東日本大震災発生直前の時点で市内に24基の津波碑があった⁵⁾ことから、津波伝承が発生していた可能性が考えられるため、本調査の対象地域とした。

2. 研究方法

東日本大震災発生以前に気仙沼市に襲来した津波の

うち、人的被害が発生した明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波（以後、「過去の津波」とする）に関する東日本大震災発生以前の認知状況や東日本大震災発生時の避難状況を調査するために質問紙による悉皆調査を行った。各津波の概要は表1の通りである。このために質問紙では過去の津波の認知状況や認知手段、東日本大震災が発生する以前の津波への備えやリスク認知、東日本大震災発生時の津波避難行動や津波に関する情報源、その内容等に関する設問を設けた。質問紙の対象者は東日本大震災による津波被災経験があり、東日本大震災発生時に気仙沼市沿岸部に居住していた方とした。しかし、質問紙の配布にあたって津波被災者が記された台帳等の利用ができなかったことから、目視で津波被災した世帯を判別でき、悉皆的に配布が可能なポスティング法によって配布を行った。今回のポスティングの対象は気仙沼市の応急仮設住宅や災害公営住宅に住む世帯と防災集団移転を行った世帯で、2017年12月6,7,9日に計2,859票を配布し、2017年12月24日を期限として郵送にて977票を回収した（有効回収率34.1%）。回答者の性別は男性432人（44.2%）、女性537人（55.0%）、無回答8人（0.8%）となった。気仙沼市の2017年12月末日の住民基本台帳人口は男性31,604人（48.7%）、女33,343人（51.3%）であったため、回答者の性別の偏りに大きな偏りはないと考えられる。回答者の平均年齢は65.9歳（S.D.±13.0歳）であった。また、回答者の平均世帯人数は3.1人（S.D.±1.7人）であった。

表-1 対象とした各種訓練の概要⁶⁾⁷⁾

	チリ地震津波	昭和三陸地震津波	明治三陸地震津波
襲来日時	1960.5.24 午前3時頃	1933.3.3 午前3時頃	1896.6.15 午後8時頃
経験者の年齢 (2017年12月現在)	57歳以上	84歳以上	121歳以上（経験者なし）
地震の震度	地震なし	震度5強	震度2～3
人的被害状況	行方不明2名	死者81名、負傷者16名	死者1906名、負傷者420名

キーワード：災害伝承、津波伝承、避難行動、防災教育、東日本大震災

住所：〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉468-1 TEL：022-752-2089

3. 結果・考察

過去の津波の認知を問う設問に対して「知っていた」と回答した人数より各津波の経験者の人数を除いた値を過去の津波の被伝承経験のある人数とし、過去の津波の伝承状況を図-1に示す。図-1より、今回対象とした全ての過去の津波について非経験者への伝承が生じていることが確認できた。また、今回対象とした過去の津波の中では、明治三陸地震津波の被伝承経験をもつ人数が最も少なかったことから、発生した時代が古い津波災害ほどその津波について伝承されにくいことが分かった。明治三陸地震津波は、分析の対象とした過去の津波の中で最も人的被害が大きな津波災害だったことから、気仙沼市において津波の規模や人的被害の程度は、過去の津波の伝承状況に影響しない可能性が考えられる。図-2は過去の津波の伝承方法を示しており、全ての津波の伝承手段において家族・親戚からの口頭伝承が最も多いことが分かった。対して学校等で教わるといった家庭の外での口頭伝承を情報源とした人は、全ての過去の津波において比較的少なかった。口頭伝承に次いでメディアを伝承手段とした回答者が多く、特に経験者が存命でない明治三陸地震津波において、メディアを情報源とした人の割合が比較的高くなった。図-3は図-2で家族・親戚から聞いたと回答した人が話を聞いた相手の属性と、その相手と同居か非同居かの内訳である。図-3より、全ての津波災害において同居の両親と祖父母から伝承を受けた人が多く、家族・親戚から口頭伝承を受けた人の約65%が同居の両親と祖父母から過去の津波災害について伝承されたことが分かった。

4. おわりに

本調査により気仙沼市において、過去に襲来した津波が非経験者に伝承されていることが確認できた。伝承状況は過去の津波の規模や被害の大きさではなく、津波が来襲してから経過した時間に影響されている可能性が示唆された。伝承手段は家庭内で行われることが多く、特に同居する異なった世代からの口頭伝承が多いことが分かった。また、経験者が少なくなる古い津波災害においてはメディアを情報源とする人が増えることが分かった。今後は津波の伝承の実態把握のために津波伝承と回答者の年齢や居住歴など条件との関係を分析し、津波伝承と津波避難行動の関係について事前の備えや災害リスク認知も含めて分析を行う予定である。また、津波伝承と東日本大震災時の実際の避難行動の関係について分析し、陸前高田市の津波伝承と津波避難行動に関する分析結果との比較を行いたい。

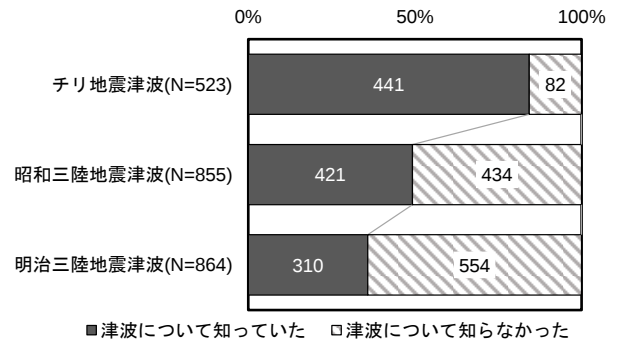


図-1 過去の津波の伝承状況

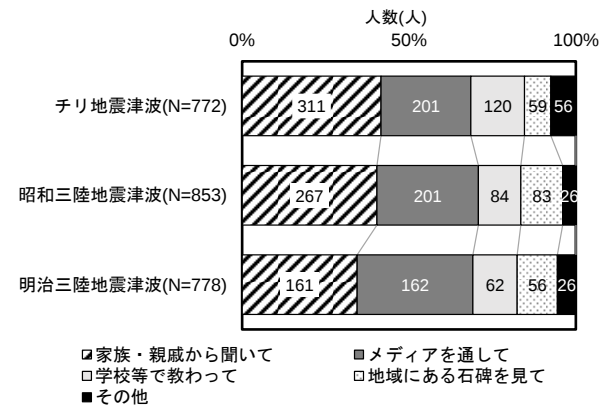


図-2 過去の津波の伝承手段

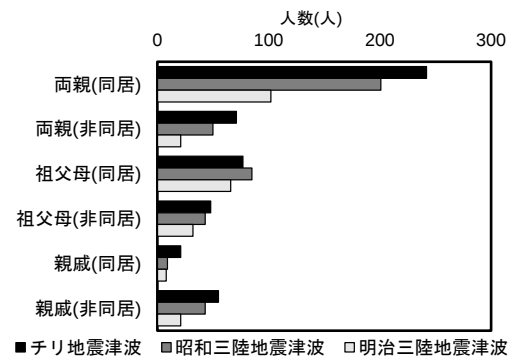


図-3 口頭伝承の詳細

参考文献

- 1) 佐藤翔輔：「災害を伝える」活動の最新動向ー「災害かたりつき研究塾」の合宿活動をもとにしてー、口承文芸研究, No. 38, pp.42-51, 2015.3.
- 2) 3.11 震災伝承研究会：「3.11 震災伝承研究会」第1次提言ー震災遺構の保存についてー 第3回研究会資料
- 3) 金井昌信, 片田敏孝, 阿部広昭：津波常襲地域における災害文化の世代間伝承の実態とその再生への提案, 土木計画学研究・論文集, Vol. 24, No. 2, 2007.
- 4) 岩手県立大学総合政策学部牛山研究室：岩手県陸前高田市気仙町地区における防災意識に関する調査, 2008 <http://www.disaster-i.net/notes/081031report.pdf>
- 5) 北原孝子, 卯花政孝, 大邑潤三：津波碑は生き続けているー宮城県津波碑調査報告 http://www.fukkou.net/research/bulletin/files/kiyou4_kitahara_uhana_ohmura.pdf
- 6) 佐藤健一：宮城県気仙沼市における取り組み www.bousai.go.jp/jishin/tsunami/tsunamibousai/tsunamibousaiday141105/pdf/panel1.pdf
- 7) 気仙沼津波フィールドミュージアム：過去に起きた大津波 www.tsunami-museum.com/kesennuma/ke_001